

領域「表現」における「自然の音に気づく」手作り楽器 の創作とサウンド・エデュケーションへの導入

吉原達也

Introducing sound education by creating handmade musical
instruments to notice the sounds of nature
and develop creative expression

by

Tatsuya Yoshihara

要旨

本稿は平成30年度に施行された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に新たに加わった文言「自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」に対応するために、ジョン・ケージの思想、レーモンド・マリー・シェーファーの「サウンドスケープ」からヒントを得て、保育現場での「音さがし」、手作り楽器の創作過程とワークショップにおける子どもたちの反応を通し、学生自身の自然の音、素材への意識を高め、表現の可能性を模索した。

小学校学習指導要領にある「生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習」へ繋げるため、サウンド・エデュケーションへの導入を検証した。

キーワード：領域「表現」、手作り楽器、サウンド・エデュケーション

1 はじめに

平成29年3月に「幼稚園教育要領」^{注1)}、「保育所保育指針」^{注2)}、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」^{注3)}(以下、三要領・指針)が改定・告示され、平成30年4月に施行された。今回の改定で新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、保育指針、保育・教育要領では3歳未満児のねらい及び内容、3歳以上児の内容の取り扱いが示された。これに伴い、「幼稚園教育要領」の内容の取り扱いにおいて今回新たに加わった文言「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」に注目した指導法を模索する必要が生じた。

そこで思い起こすのは「耳を開け」と唱えたジョン・ケージ^{注4)}と、「サウンドスケープ」の創始者レーモンド・マリー・シェーファーである。

ジョン・ケージはアメリカの現代音楽作曲家で20世紀生まれの作曲家の中でもっとも大きな影響力を持っていた。プリペアド・ピアノの発明やインド思想、禪の教えに傾倒した後、偶然性による作曲を行い、有名な沈黙の作品「4分33秒」を発表した。その後一貫して探り続けていたのは音そのものを聴くことであった。禪の研究者久松真一はケージの質問に対して「あなたは、眼と耳を区別して考えてはいないか。私たちは眼で聞くこともできるし、耳によって見ることでできる。そしてその一体がのぞましく自然であろう」と答えた。そして武満徹は「私たちは眼によって見ることさえわすれてはいないか……。」と自問自答している^{注5)}。

レーモンド・マリー・シェーファーはカナダの現代音楽作曲家で、1960年代終わりに風景の「ランドスケープ」と音の「サウンド」を組み合わせた、音の風景「サウンドスケープ」を提唱した^{注6)}。「サウンドスケープ」とは機械の音などの人工音と波、風や鳥のさえずりなどの自然音、人間の生活音などの音環境の総称で、その概念は望ましい音環境の創造（サウンド・デザイン）へと発展し、日本では環境庁が1996年に「残したい日本の音風景百選」を制定するなどサウンドスケープ思想は定着している^{注7)}。

その著書「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」では子どもに対し、身近な自然の音・さりげない日常の音から世界に対する柔らかな感性と優しい眼差しを取り戻す、音と耳と心を澄ます、100のサウンド・ワークが提示されている^{注8)}。筆者はケージとシェーファーの提唱からヒントを得て「自然の音に気付く」手作り楽器の創作を通して音楽表現の指導法を検討することにした。シェーファーはサウンドワークの対象年齢を10歳～12歳としているが、本稿では幼児を対象としたサウンド・ワークとしての可能性を探ってみたい。

2 保育現場での「音さがし」

本学は2年次の6月と10月に幼稚園教育実習、8月と9月に保育所保育実習を行っている。実習終了時の学生たちに「音さがし」のアンケート（回答数14）を行い、保育現場で聴くことのできた音を挙げ、Ⅰ自然音、Ⅱ人間の音、Ⅲ機械音に分類した。回答は以下の通りである。

【Ⅰ自然音】

雨の音、風の音、蝉の鳴き声、犬の鳴き声、カラスの鳴き声、鹿の鳴き声、カエルの鳴き声
葉っぱが擦れる音、砂の音

【Ⅱ人間の音】

歩く音、親子で会話しながら登園する声、先生の声、他クラスの園児の声、赤ちゃんの泣き声、ピアノの音、笑い声、歌い声、寝息、お腹の音、字を書く音、食べる音、紙の音、紙芝居をめくる音、ハサミで切る音、靴の面ファスナーを剥がす音、椅子の音、玩具の音、笛の音、太鼓の音、ほうきで掃除をする音、土を踏む音、落ち葉を踏む音、お寺・教会の鐘の音、門の開閉音

【Ⅲ機械音】

車の音、信号機の音、自転車の音、電車の音、飛行機の音、ショベルカーの音、扇風機の音、12時のサイレン、小学校のチャイム、エアコンの音、体温計の音、時計の音、冷蔵庫の音、電話の音、CDラジカセの音、午睡時のオルゴール、掃除機の音、トイレの水を流す音、テレビの音

その結果、Ⅱ人間の音や、Ⅲ機械音のいわゆる生活音の例に関しては多数上ってくるが、Ⅰの自然音に関しては雨風の音という漠然とした表現や虫・動物の鳴き声にとどまり、意外と少ないことに気付く。まずは実習生、保育者として、自然の音に気付くために音への意識を高めることも必要であると感じた。

3 手作り楽器の創作と検証

自然の音への意識を高めるため、民族楽器をモデルとした手作り楽器を創作し、ワークショップでの子どもたちの反応を参考にし、表現の可能性を模索した。

3・1 手作り楽器の工夫と改良

自然の素材を用い、自然界の音を再現する物もある民族楽器をモデルとし、身の周りにある素材で手作り楽器を創作することにした。筆者が所有する民族楽器の材質や形状、音色を参考に、学生たちは音のイメージを膨らませながら各々の手作り楽器を考案した。その際音色の豊かさ、安全性を考慮し、改良を加えていった。また、子どもたちが親しみを持つ楽しい楽器名を付けるようにした。

学生の創作楽器を検証すると、ある傾向が浮かび上がってきた。何れも見た目がとても可愛らしくマスキングテープ等で装飾を施し、鋭利な部分をなくすなどの安全性を考慮は出来ているが、楽器として肝心の音色の点ではやや魅力に欠ける部分もあった。身近な材料という制約から音量不足や、単調な響きを感じるのは否めなかった。

また、最も多く使用された材料はペットボトルであった。中が空洞で密閉もしやすく、どこかの家庭にもある為だと思われる。ペットボトルを用い、中にビーズやビー玉などを入れたマラ

カスの様な打楽器の創作が多かった。

逆に少なかったのが息を送り込んで音を鳴らす気鳴楽器と、弦を振動させて音を鳴らす弦鳴楽器であった。気鳴楽器は音を鳴らすのが難しく、弦鳴楽器は弦と、弦の張りに堪えうる材料の確保が難しいためだと思われる。

ではいくつかの創作楽器を取り上げ、楽器制作・改良の過程を紹介する。

楽器名「うさぎ DE ダンス」

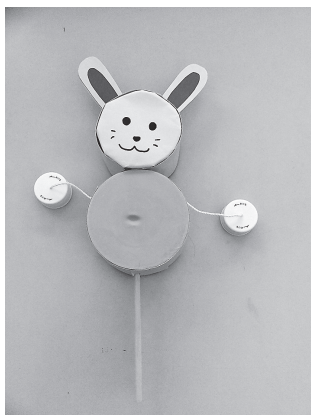


写真1 改良前

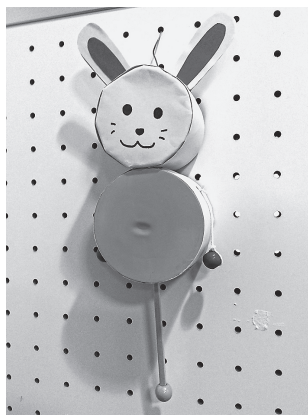


写真2 改良後

材料：画用紙、割り箸、タコ糸、ビーズ、ガムテープの芯、筒状の菓子箱、風船

演奏法：割り箸部分を持ち、でんでん太鼓の要領で振り回す。

問題点：うさぎの手の部分にペットボトルキャップを用いたため、打点の音が鈍かった。

工夫・改良点：響くような音を出すためゴム風船を強く張り、ペットボトルキャップからビーズに変更した。割り箸の先にビーズを付けて安全面に配慮した。

楽器名「はんぷりん」



写真3 改良前



写真4 改良後

材料：軍手、ボタン、瓶の栓、かまぼこ板

演奏法：軍手を手にはめ、拍手をしたり、ボタンでかまぼこ板を擦って楽しむ。

問題点：取り付け材料が木のボタンのみだったため、木質音のみで単調であった。

工夫・改良点：金属質の栓や、溝彫りしたかまぼこ板を加えた。ボタンが取れない様、縫い付けた。ビール瓶の栓の縁で怪我をしない様、ボンドを多めに付け接着した。かまぼこ板の角を削り安全に配慮した。

楽器名「カチャ犬」

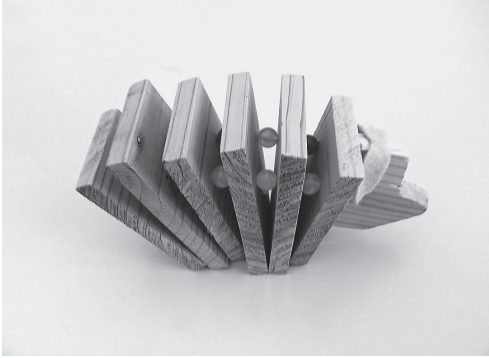


写真5 改良前

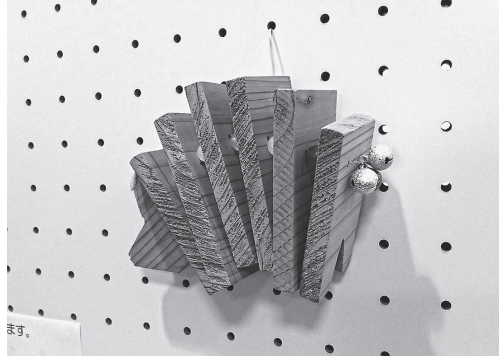


写真6 改良後

材料：木材、ビーズ、タコ糸、フェルト、鈴

演奏法：犬の顔かしばをもち振る。

問題点：音が単調であった。

工夫・改良点：木材を使用することで大きな音を出せるようにした。しばに鈴を付け2種類の音が鳴るようにした。見た目を犬にして可愛くりボンも付けた。

楽器名「ギタ島三郎」



写真7 ギタ島三郎

材料：ティッシュの箱、キッチンペーパーの芯、輪ゴム、シール、マスキングテープ

演奏法：指でゴムを弾く。弾く力を変え、強弱をつける。

問題点：ゴムの張りが弱く、音が小さかった。

工夫・改良点：ゴムの張りを強くし、音量を上げた。ティッシュの箱の模様をそのまま活かし、シールやマスキングテープで飾った。ネーミングにユーモアがある。

楽器名「アラウンド・サンダー」



写真8 アラウンド・サンダー

材料：ダンボール、ボイド管、ポリエチレンテープ、ラップの芯、ビニールテープ、折り紙、アルミホイル

演奏法：手に持ち、片手でバチを使い叩く。台に置いて両手でバチを使い叩く。

問題点：胴の部分にガムテープの芯を用いたため音が小さかった。

工夫・改良点：音を大きくするためにボイド管に変更した。折り紙やアルミホイルで可愛く装飾した。

今後これらの手作り楽器の音に深みを与える手法としては、日本の三味線や琵琶、中国の笛子、アフリカのバラフォン、カリンバなどで用いられるサワリの響きであると考え。音の中に「ビリビリ」という雑音をあえて含めることで音に奥行きを与え、生命力を持つという民族楽器からの知恵とエネルギーを手作り楽器の中に活用していきたい。

3・2 手作り楽器ワークショップ「自然の音を探そう～なんの音にきこえるかな？」

創作した手作り楽器の子どもたちの反応を見るために、本学大学祭「桜山祭」で手作り楽器ワークショップ「自然の音を探そう～なんの音にきこえるかな？」を開催した。一般の子どもたちが遊べるように開放した教室「子どもひろば」内にスペースを設け、縁日遊びなどを楽しんだ子どもが気軽に参加できるようにした。

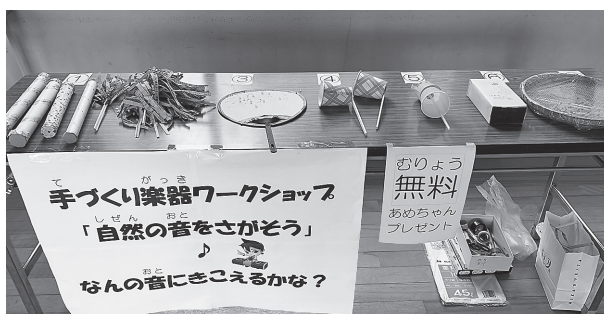


写真9 ワークショップスペース

3・1で創作した手作り楽器の中から自然をイメージし易い物を選び、机上に7種類の楽器を配置した。子どもたちは手に取って楽器を鳴らし、自分では困難な場合は学生が援助し、音を聴き、感じたままに口頭で表現してもらい、学生がそれを記録する。「～みたいな音」など

具体的な表現や、「カラカラ」「ブーブー」などのオノマトペでの表現もそのまま記録した。その結果、制作者の意図しない意外な反応もあり、子どもたちの純粋な表現に感心するものもあった。4歳から10歳までの男女10名の記録がとれた。

その記録を学生たちにフィードバックし、それぞれの楽器について、保育現場でどのように活用できるか意見を出し合った。

楽器名「レインスティック」



写真10 レインスティック

作り方：ラップの芯に穴を開けつまようじが内側に出るように刺し、中にビーズを入れふさぐ。折り紙やマスキングテープで装飾をする。

子どもの反応：カラカラカラー、カサカサ、マラカスみたい、雨の音、アズキの音、炭酸の音

活用法：絵本読みをしながら、効果音として。雨の日の室内遊びで音遊び。ジュース屋さんごっこで炭酸の演出に。太鼓のバチとしても使える。海を想像できる歌を歌いながら。午睡の前に奏でて、気持ちが落ち着くように導く。

楽器名「そよりん」



写真11 そよりん

作り方：新聞紙を細く切り、割り箸の先に束ね、ほうき状にする。

子どもの反応：サラサラ、ガラガラ、サンサン、風の音、はっぱの音、ほうきみたい、枯れ葉の音

活用法：ダンスの小道具、午睡前に聴いて寝つきやすいように。劇の風の効果音に。おばけ屋敷の木の葉の効果音に。

楽器名「パチパチうちわ」



写真12 パチパチうちわ

作り方：うちわの表面にテグスを通し、先にビーズを固定する。

子どもの反応：カラカラ、パチパチ、雨の音、バッチが当たる音

活用法：焼き芋ごっこで焚き火の音の演出に。線香花火の効果音に。暑い時に仰きながら音を楽しむ。

楽器名「パカパカ」



写真13 パカパカ

作り方：割りばしの先に紙コップの底をテープで固定する

子どもの反応：トントン、馬の足音、太鼓の音

活用法：動物ものまね遊びに。リトミック時の馬の足音で。何の動物の足音かクイズで。子どもたちと歌を歌いながら、効果音として。

楽器名「ブタ子ちゃん」

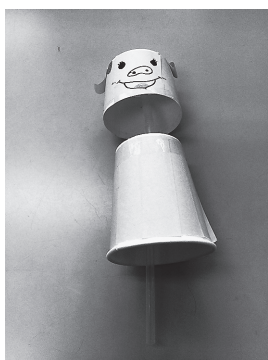


写真14 ブタ子ちゃん

作り方：2つの紙コップの1つの底に穴を開け、曲がるストローを突き刺し、ストローの先にもう1つの紙コップを固定する。ストローの蛇腹の部分が穴に擦れて音が鳴る。

子どもの反応：ブーブー、おならみたい、ふたの鳴き声、かえるの鳴き声

活用法：子どもと制作して音を楽しむ。鳴き声のする人形遊びで。

楽器名「Sea っと箱」



写真 15 Sea っと箱

作り方：箱の中に、短く切ったストロー片を入れ密閉する。

子どもの反応：波の音、海の音、マラカスみたい

活用法：水遊びの前の導入で。

楽器名「ザブーンざる」



写真 16 ザブーンざる

作り方：乾燥マカロニ（貝や幾何学模様などの形）を浅いざるの中に置き、ビニール袋で包み込む。

子どもの反応：マカロニが入ってる、海の音、波の音、大波の音、水の音

活用法：洗濯ごっこに。水遊びの前の導入に。大人数で円になり、隣の人に音を鳴らさないように渡すゲーム。魚釣りゲームの時に見立て遊びをする。

子どもの反応の中には、似たような音の出る他の楽器に例えたり、楽器の見た目の印象からイメージをしたり音以外の情報を加え、総合的に捉えているものがあつた。

これらの手作り楽器を、実際の保育現場で活用する場合の活用法として、絵本読み、ごっこ遊び、水遊びやゲームなどの演出としての効果音で用いるとのアイデアがあつた。その中でも興味深いアイデアは午睡前での使用など、生活の中で気持ちを落ち着かせるための音具として活用するというアイデアだつた。心地よい音色が情緒の安定など心への効果の可能性を感じさせる意見である。

3・3 手作り楽器を用いる指導法の考察

手作り楽器の創作が終了した時点で「手作り楽器の創作を通じて」という振り返りのアンケートを取つた。設問は、問1「手作り楽器は保育の現場で必要だと思いますか」問2「手作り楽器を創作して、新たに発見したことは何ですか」問3『『自然の中にある音』に気付くためにはどうしたら良いでしょう』の全3問で、回答人数は19名だつた。

問1「手作り楽器は保育の現場で必要だと思いますか」に対して「はい」と回答した学生は

100%であり、理由として「子どもたちが音楽に興味を持つきっかけになる」「音の出る仕組みを感じることができる」「本物の楽器は高価だから」「言葉で表せないことを音で表現できる」「手作りのものに興味、関心を持つことができる」「音を聴く、奏でる楽しさを感じることができる」等が挙げられた。身近な素材が発する新たな音の発見や、興味やイメージを沸かせる形状により、音への興味を持ち、言葉や歌以外の表現への関心を高める教材になるものと考えられる。

問2「手作り楽器を創作して、新たに発見したことは何ですか」に対しては、「糸の長さや張り方で音が違ってくる」「身の周りにある不要物で意外と使える材料がある」「他学生とアイデアを共有することで配慮すべき点に気付くことができ、視野が広がった」「どうしたら自然の中の音に近い音を生み出すことができるか考えるのがとても楽しく、どのような素材を使うか見つけるのが楽しかった」「ストローを短く切っていく度に響く音が高くなって面白かった」「音が出易いか、危なくないか、壊れやすすくないかなど細かく気にすることが必要だと感じた」等が挙げられた。創作する中で、音の性質、素材と音の関係を実感し、素材の扱い方の工夫、配慮に気付くことが出来た。

問3「『自然の中にある音』に気付くためにはどうしたら良いでしょう」に対しては「外に出る」「目をつむる」「耳を澄ます」「絵本などを通して、自然に興味を持てるようにする」「音がない様なものでも耳を傾けることで音を感じるかもしれない」「静と動の区別ができるよう、日頃から環境構成を整える」「保育者自身が自然の音に耳を傾け子どもたちと共感する」等の意見があった。自然への興味、生活音以外の音への興味や、「無音」と思われるもの、すなわち静寂や記憶の中の音に気付くなど、音に対する意識が高まったと思われる。レーモンド・マリー・シェーファー「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」の中の「音のない世界を創造する」や「今では聞けない音を思い出す」という部分を活用できる^{注9)}。

手作り楽器の創作を通して、学生自身の自然の音、素材への興味、関心、意識を高め、そこから生まれる表現の可能性を模索することが出来た。

4 おわりに

1世紀の古代ローマの哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカの言葉に「すべての芸術は自然の模倣である」とあるように、あらゆる表現の源には自然の素材が含まれている。自然の音に気付くということは、あらゆる芸術への入り口であり、子どもたちの音楽表現への一歩である。

ジョン・ケージは1951年に無響室に入り、自分自身が意図せずに出している二つの音（神

経系統の作用、血液の循環)を発見した。無音のはずの空間に自身の関節の軋み、鼓動や血流等、それは生命の音であった。命ある所には必ず音が存在する。「自然の中の音」に気付くということは、そこに存在する命に気付くことでもある^{注10)}。

平成29年告示の小学校学習指導要領^{注11)}には次のような記述がある。

- ・音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る。
- ・音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る。(以下略)

これらは音楽表現に関する内容であり、「生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習」という部分はリトル・サウンド・エデュケーションの「街角で耳を澄ます」「リスニング・ウォーク(音を聞きながらさんぼすること)」「音だけでまわりの動きをつかむ」「音を録音して集める」「身のまわりの嫌な音に気づく」「好きな音を作る」「音の宝さがしゲーム」等を活用できると思われる。保幼小接続の観点からも保育現場でのサウンド・エデュケーションを進めていきたい。

引用・参考文献

- 1) 「保育所保育指針」厚生労働省, 2017.
- 2) 「幼稚園教育要領」文部科学省, 2017.
- 3) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」内閣府, 2017.
- 4) ジョン・ケージ、柿沼敏江訳:「サイレンス」, 水声社, 1996.
- 5) 武満徹:「音、沈黙と測りあえるほどに」, 新潮社, p.102, 1971.
- 6) レーモンド・マリー・シェーファー:「世界の調律 サウンドスケープとはなにか」, 平凡社ライブラリー, 2006.
- 7) 「残したい日本の音風景百選」環境庁, 1996.
- 8) レーモンド・マリー・シェーファー・今田匡彦「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」, 春秋社, 1996.
- 9) レーモンド・マリー・シェーファー・今田匡彦「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」, 春秋社, p.97, p.106, 1996.
- 10) ジョン・ケージ、柿沼敏江訳:「サイレンス」, 水声社, p.34, 1996.
- 11) 「小学校学習指導要領解説音楽編」文部科学省, p.6, 2017.